

魔法少女まどか☆マギカ —異端の物語—

4WD skyline

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中性的な顔立ちの少年、百咲豹矢は、いたって普通の中学生。

何事もなく平和な毎日を暮らしていた彼はある日、助けを求める声を聞き、声の主の元へと駆けつける。

しかし、その声は彼の想像をたやすく超えた世界へと誘う…。

目次

起章 神と悪魔と…

第一話 NORMAL DAYS END (プロローグ)

1

spec&magic	—	4
Do you want to help?	(1)	6
Do you want to help?	(2)	9
I want to…	(1)	12
I want to…	(2)	15
I want to…	(3)	17
Tea time	—	21
翔章 噛み合うはずのない歯車		
Start New Days	—	27
First hunt & heat love?	—	33
Countdown (ready)	—	38
Countdown (3)	—	43
Countdown 2	—	47

起章 神と悪魔と…

第一話 NORMAL DAYS END (プロ
ローグ)

ちよつとした能力を持った少年と大きな概念となった少女
そんな二人の不思議なお話

「ふぁー。」

と寝ぼけたような声を出す俺、百咲豹矢《ももさきひょうや》は、見
滝原中学二年の一般生徒である。

紫の髪に女子にも見える中性的な顔立ち、紫色の瞳、それが俺のお
おまかな外見だ。

そしてこの中学校には二週間前に転校してきた転校生だ。

「また寝てたのー?」

と、隣の席の鹿目まどかは、話しかけてくる

「マジ、国語とかねみーし。」

と、おれは、返す。

「次、何だっけまどか?」

「もうショートやって、掃除しておしまいだよ。」

とたわいもない会話をする。

「まったく、おまえはいつも寝てんな!」

と、男勝りな女子の声が後ろから聞こえた。

深い赤い色の髪の少女、佐倉杏子がやってきた。

杏子と一緒に水色の髪の少女三樹さやかもやってきた。

「よ。眠り転校生。」

「やめろって。」

「にしし。やーだよ。」

そして、

「おーす、豹矢」

「やあ。百咲くん。」

と、中沢、上条の二人がやってくる。

「今日は、職員会で掃除なしだった。」
と上条が言う。

「んじや。飯食おーぜ！」

と中沢は言う。

実は、この二人とは、友人なのだ。

「んじや。いこつかなー。なっ上条。」

「うん。僕もそうするよ。」

一時間後、俺たちは、ショッピングモール内のハンバーガーショップで、チーズバーガーをたべていた。

「できー、この前の上条のバイオリン、マジやばくて俺びっくりしたんだぜー。」

「かいかぶりすぎだよ。」

と、中沢と上条が話している。

「へー、バイオリンかー。プロめ目指してんの？」

「まあね。」

「にしても、上条この間まで、腕の回復絶望的だったのに、よくかいくできたな。」

「ほんと、奇跡みたいだよ。」

そう、上条は、俺が二週間前に見滝原に転校してくる前に腕に大きな疾患が、あったのだが、ある日突然治ったのだ。

まさに、奇跡だ。

と、俺が物思いにふけている時だった。

(・・・けて・・・)

「!？」

ふと後ろを見るも誰もいない。

「どうしたんだ？」

と中沢が言ったときだった。

(助・・・けて・・・)

まただ、声がする。

そして、

(だれか・・・助けて・・・!)

今度こそはつきり聞こえた。

誰かは知らないが、確実に（信じられないが）念話で話してきている。

「ごめん！用事思い出した！悪いけど、今日は、これで！」と、言つて急いで店を出る。

そのとき、目の前に猫っぽい生物が見えたと同時に、

（リスタートは、成功したみたいだ。）

と、聞こえた気がした。

が、そんな言葉は、今は必要ではない。

片っ端から、モール内を探す。

そして見つけた。こえの主を。

それは、まどかにとてもよく似た少女だった。

そしてその瞬間、俺の日常は、終わりを迎える。

s p e c & m a g i c

「は…….…….?」

そんなとぼけたような声が自分の喉から出た。そりやそうだろう、だって自分の知り合いにとてもよく似た少女がいたらそんな声もでるだろう。

いやそんなことどうでもいい。その少女が傷だらけであるという状態であるのが問題なのだ。

『おや、大丈夫ですか？マスター？』

と、機械音の女性の声がきこえた。

「バリスタ。」

と、俺が学生かばんから取り出したのは、H&K社で作られた突撃銃《アサルトライフル》G11をモデルとした特殊装備バリスタ。

俺のある特殊能力いわゆるSPECと呼ばれるものを使う武装だ。

本家G11と違うのは色が白をベースとしてさらに紫の線が幾重にも描かれている点。

そして最大のポイントは、AIが入っていることだ。

「どうしたんだ？」

と俺がいうと、

『マスターのバイタルが驚きを持ったときのものと酷似したため緊急セットオン行いました。』

と返してきた。

が、その声をまるで塞いでしまうような光景がそこには、あった。言うならば悪夢をそのまま現実を持ってきたといえいいのか。そんな光景が目の前にひろがっていた。バリスタもそれを察したのか警戒を催すように、

『セーフティを解除します。』と言ってきた。

まあそんなことはさておきまずはこの少女の止血が優先順位としては第一だ。

が、次の瞬間

ードガアアアア、と轟音が鳴り響いた。

音源に振り返るとそこには、影みたいな10メートル以上ある、《バケモノ》がいた。

しかし事態は、これを境にさらにヒートアップする。

その影（？）が襲い掛かってくると同時に、弓の雨が影に向かって降り注ぐ。

さらにリボンがその少女を包み戦闘エリアから離脱させる、さらに俺までも。

そして、雨の主が謎すぎる衣装に身につけ弓を持ったまどか、リボンの主が金髪で古式の銃を持った女性さらにその周りには、赤い衣装を着た杏子、青い女性騎士のようなさやかがいた。

影が手に持っていた刀を振り下ろす。すると、槍を持った杏子とレイピアのような細い刀をもったさやかが華麗に攻撃を回避し、―ザシユ、ザシユ、と槍と刀を斬りつける。

影が後ろへよろける。すると標的を変えたのか、まどか、ではなくあの傷ついた少女に突進する！

「バリスター！」

と、俺は叫ぶ。そして、

「いきなりだけどロードドライブいくぞ！」

『了解しました。ロードドライブ01 《ライトニングブラスター！》』

と叫びバリスタを構える。

風向や風力など無視した絶対的な一直線上の砲撃。

それを行うのがロードドライブシステムだ。その正体は、対物ライフルをはるかに凌駕した純粋な雷撃砲だ。

この時点で察した人もいるかもしれない。そう俺のSPECは、雷を行使する能力だ。

照準をあわせる。距離、目測300メートル射程圏内。

そして放たれた砲撃は、青白い色を放ち、影を塵もなく消し去った。

Do you want to help? (1)

頭がぐらぐらする。いきなりロードドライブを行うと出てくる副作用みたいなものだ。

と、「ひよ、豹矢君!?!」

と驚いた表情のまどかが話しかけてくる。

「お前らこそなんなんだよ、それ!?!」

と、俺はまどかたちの服装を指差し、シャウトする。

「えっと、これは・・・その・・・」

と、返答に困っている様子のまどか。すると、

「・・・っ・・・」

と、例のまどか似の少女が目をさました。

が、――バタツ

と倒れてしまった。

少女の方を見ると傷は治っているものとても苦しそうな表情だ。ふと顔を触ってみると、

「あっつー!」

と言ってしまうほどの高熱を持っていた。

「ちよっ、どうしたのよっ!」

と、さやかが言ってくる。

すると、

「大丈夫よ」

と金髪の女性が言ってきた。

「彼女は円環の理、それぐらいどうにかなるわ。」

「はあ!?!」

「いいから、後は私たちに任せ・・・」

「ぎっけん!! どうせこの子はその何とかだからほっておこうて思っ
てんだろ!?!」

と大声を張り上げてその場を俺は立ち去る。

そして店を出た後、

「もしもし!?!美鈴姉《ねえ》?」

と、俺は電話をした。

「熱い、苦しい、頭が、重い

? なんか少し体が軽くなった?

少しずつ目を開ける。

するとそこには、紫髪の少年と、ショートヘアの女性がいた。

俺はその後美鈴姉にドリンクタイプのエネルギーゼリーを買って帰宅した。

「急いで豹矢君!」

と促され俺は、少女を布団に寝かせる。

わきの下など重要な血管を氷袋などで冷やす。

すると三十分後、少女が目を覚ました。

「(こ)は・・・」

と少女は目を覚ます。

「よっ、だいじよぶか?」

「(こ)くん)」

と少女は頷く。

少女の顔立ちはほんとにまどかに似ている。

瞳は黄色で髪の色は薄いピンク色。まるでまどかの顔を大人にしたようなかんじだ。

「まあ、少し体調割るそうだし、しばらく休んでいきな。」

「いや、すぐに、行か、ない、と。」

「ばか! そんな体調で行ったらヘタしたら死ぬぞ!」

「私は、概念、だから、風邪ぐらいで・・・! 使命を・・・」

「お前さっきまで満身創痍の状態だったんだぞ!?! 今だって少し回復しただけだ!」

「だけど・・・」

「いいから休め!」

「・・・」

と、美鈴姉が、

「まあ使命のことは、少し休憩でいいんじゃないかな? 概念だろうとなんだろうと、しつかりと休まないと何事もできないよ?」

と言ってきた

「・・・」

「いいな!？」

「・・・わかった。」

その後自宅マンションの前で俺と美鈴姉は、話をしていた。

「あの子いったい何なんだろう?」

「specホルダーかもしくは・・・」

「?」

「いや忘れて」

「うん、わかった・・・」

俺が最後に言いかけた言葉、それは、

―神じゃないのかな・・・―

その夜俺が少女の隣で看病していると、

「・・・うん・・・」

と少女が言い、床にいていた俺の手に彼女の手を合わせてきた

Do you want to help? (2)

翌日…

まず俺が目を覚ます。

その数秒後…

「…ん、んん」

と、円環の理と呼ばれていたあの少女が目を覚ました。

… と思つたら、

「スウ…」

寝てしまった…

昨日ひどい高熱をこの少女は持っていたので、でこの部分を触る。

と次の瞬間、

「!?!」

と声を出さず、だが途轍もないイメージの奔流が、俺の脳内を襲う。

多くの少女が何か苦しむような表情をしている、しかし次の瞬間今俺の部屋で寝ている少女がそつと手を伸ばすと、苦しんでいた少女は穏やかな表情となり、そして救い主の少女と一緒に光の中に消えていく。

それが何百何千何万と続く。

鎧の少女、シスターの少女、捕虜の少女、etc。

そしてその少女達は、皆苦しんでいるが一人の少女によって救われていく。

しかしその救い主の少女の顔には、乾いた作り物のような笑顔が…

と、ここでイメージの奔流が終わる。

そして、

「ふぁ…」

と眠たげな表情で少女の目が覚める。

と次の瞬間、

「ガバア！」

と布団を一気に捲り上げる。

「こ、ここは…!?」

「ああ、心配すんな。俺の家だ」

「は、早く行かないと…!」

「待てよ」

と俺は、少女の腕を掴む。

「昨日のあの影のこと、そしてあんたの事。洗いざらいすべて話してもらおうか?」

と俺は言う。

「昨日のあれは魔獣って言う存在」

「はあ…」

「そして私やあなたの目の前に現れた彼女達は、魔法少女と呼ばれる存在、そして私は、円環の理と呼ばれる存在」

「ふーん…」

「あなたに話せるのは、ここまで…」

「苦しんでいた魔法少女の救済」

「!!」

「それがお前昨日言っていた使命じゃねえのか?」

「どうしてそれを…!」

「お前の額に触れたとき変なイメージが流れ込んできたんだよ」と、俺は言う。

「ええ、そうよ。それが私の使命」

「お前つらかったんじゃないやねえのかそんな使命」

「いいえそんな事…」

「じゃああの作り物の笑顔は何だ?」

「……」

「そうやって心の中にひたすら隠して、どうなんだよ正直」

「… 苦しいわよ…！」

「…」

「何の罪もない子達があやって死んでいくのよ！誰にも知られず たったひとりで！でもそうじゃないと彼女達は魔獣以上の脅威になつてしまう！それを無視することもできない！そんなの、そんなの作り物の笑顔でやっていくしかないでしょ！」

と瞳に涙を溜め叫ぶ少女。

「おまえさ、誰かに相談したことあんのかよ…」

「ムリよ！だって私は概念たる存在！涙を流さず少女達を死の世界に送り届けなければならぬのよ！」

「じゃあ何で今泣いてんだよ！」

「！」

そう少女の顔には、少女の心の中を表したような大粒の涙が流れていた。

I want to... (1)

—私は、今泣いているの？

そう思い円環の理である私は、慌てて頬を擦る。すると、生暖かい液体が流れていた。

その正体はすぐわかった、涙だ。

それと同時に。

「本当は、嫌だったんだろ。魔法少女の終わりをあんなふうに終わらせるのは」

と、目の前にいた紫の無造作ヘアの少年は言った。

「ええ」

「だから泣いた」

「そうよ」

「だけど自分とおんなじ存在が自分しかいなかったから誰にも言わず一人生きてきた」

「何であなたは...」

—そんなにも私の事がわかるの？

—と言うおうとした時だった。

「俺、人が傷ついている時の心、よくわかるんだ」

「あなたは、一体何者なの？」

「普通の少年だよ、少し異能が使える点に目をつぶればな」
「...」 どうしてあなたは私を助けたの？」

「助けたかったから、じゃ駄目かな？」

と少年が言ったときだった。

—ぐううううう

と、私のほうからおなががる声が聞こえた。

「しゃーねーなー。今日土曜日だしなんか食いにいくか《優菜》。」

「ゆ、うな?」

「お前の名前。円環の理って言いにくいから」

と俺は言う。すると、

「ゆ、うな。優菜。」

と《優菜》が言う。

「わかった。私は優菜ね。」

「ああ。後、それで戸籍登録しておいたから。」

「え…!」

「円 優菜《まわり ゆうな》それがお前の名前な。」

「ええええええええええええええええ!」

数分後近くのカフェにやってきた俺と優菜はとりあえずモーニングを食べた。

その帰り道だった。

「見つけたわ」

と言う声を聞き俺たちは立ち止まる。そこにいたのは、

昨日の金髪の女性ときやかだった。

「なんだよ」

と俺が言うと金髪の女性が口を開いた

「早くその個体を本体に戻さないと、彼女は、円環の理としての機能を失ってしまうわ」

「それで?」

「彼女を返してもらおう」

「こいつようやく自分の心の内を曝け出したんだぞ!」

「それがどうしたの?」

「こいつはあんたには返さない」

と言う。すると、

「あんまり使いたく無い手なんだけど…」

と、女性が言った瞬間だった。

周りから人が消えた。

「これは人払いの魔法。ここであなたには倒されてもらうわ」

なるほど、人目を消して優菜を拉致るつもりか、

「なら、《バリスタ》！」

と、俺はシヨルダーバッグから唯一無二の相棒、バリスタを取り出す。

すると金髪の女性も変身した。

服装はどうでも良いにしる問題は彼女の手に握られている古式の銃だ。

射程も何もかもが不明。しかもおまけに魔法が使えると来た。

「わかったわそこまで自分の意思を貫き通したいのなら全力でかかってらっしゃい！」

と女性が銃を構える

「へ、面白れえ。後悔してももう遅えぞ！」

と俺もバリスタを構えた。

I want to... (2)

私、鹿目まどかは今、とあるビルからある人たちを見していました。一人は円環の理、一人はさやかちゃん、一人は魔法少女姿のマミさん。

そして、紫の髪に普通の日本人の顔立ちながらも少女っぽさが入った顔の男の子、豹矢君。この四人がいました。

その4人の中で豹矢君と、マミさんはまさに一触即発の状態でした。

「だいじょうぶかな」

と私が言うと、

「釘打つとくようなもんだろ?」

と、隣にいた杏子ちゃんが答えました。

… それでも私はとても心配でした。

今日の前に魔法少女がいる。

そして敵対状況である。

保護人物が一人いる。

これが今の俺を取り巻く周囲の状況である。

「コネクティング」

と言いつつ俺の電気とバリスタの電気の波長を同一化させる。

前回はこれが無かったため目眩を起こしたのだ。

そして…

ーパン!ーと魔法少女のライフル(魔法の杖)が発砲される。

こちらにも負けじとバリスタの連射で応戦する。

ーババババババババババ!ーと発砲するも華麗に避けられ一発も当たらない。

優菜に変身してもらおう手もあるのだが病み上がりの体での戦闘はつらいだろう。

ーバババババババババ!ーと魔法少女のライフルが今度は何十丁も
の数で発砲される!

ービシッ!バシッ!ーと、俺の黒のジャケットに被弾する!

その時だった、体が動けない！なぜだ!?

ふと足元を見ると黄色のひもが俺を巻き付けていた！

「これで終わりよー！」

と魔法少女が取り出したのは、レミントンデリンジャーだった。

大きさは優に、使い手の魔法少女の3倍以上はあった。

「ティロ・ファイナーレ！」

といった直後、大きな光の玉が俺を直撃し俺は吹っ飛んだ。

ーああ、負けたのかー そう思っていた時だった。

悲観に暮れる優菜の顔が見えた。

そしてふと、ある人の言葉を思い出した。

警視庁の未詳の係長の、野々村光太郎さんの言葉だった。

『Specホルダーは強力だ。だからこそ、その力におぼれて犯罪を犯す者がいる。だけどね、僕は君がきつとその力を、誰かを助けるものになると信じているんだ』

その言葉で目が覚めた！負けた勝ったじゃない、誰かを守り切らなければならぬ、それが野々村さんとの《男の約束》なのだから！

「うおおおおお！」と思いつきり体を地面の方向に向けバリスタを構える。

「ロードドライブ01発動！」

『All right！マスター！《ライトニングブラスター》！』

と俺とバリスタが話す！

魔法少女はとても驚いた顔をしている。そんな彼女におれは、

「これが俺の覚悟だ！」と叫んだ！

といったと同時に俺は、トリガーを引き絞り絶対的な一撃が放たれた。

その光線は魔法少女どころか、その周囲一帯をも吹き飛ばした！

そしてその直後、俺もぶっ倒れた。

「豹矢!!」

と優菜と名付けられた私は、魔法少女の姿に変身して豹矢のところに飛んでいく。

周りはひどい有様だった。

家が何軒か破壊され、道もめくれあがっている。

その道の先の大きな穴の中に豹矢はいた。

「豹矢、しっかりして!」と、私は叫ぶ。

次の瞬間だった、魔獣の結界の中に入っていた。

「!?なんで!?!」と私は叫ぶ。

すると、

「初めまして、神様」

という少女の声が聞こえた。声のほうを向くと悪魔のような墮天使のような装いの少女がビルの上に立っていた。

「まったく、私の魔力で威力を上げたら上げたでこんなに破壊するなんて」

と少女が言った。

「どういう、こと?」

「簡単なことよ、ここに居る皆を使った私の罠ってことよ」

「わ、な?」

「そう、あなたを消すためのね!」

といったと同時に黒い羽根が私を襲う。

それらをかがんで防ぐと同時、弓を引き絞り反撃する。

が、放った矢はすべて回避される。

そこで弓を一気に引き絞り、大型の矢を放つ。

避けられるものの、その爆風によってその少女は吹き飛ばす。

続けて弓を放とうとした私の手が止まった。

その少女の脇に抱えられた人物を見て止まってしまった。

「そ、んな...」

「そう、あなたにとって大切な子でしょ、豹矢君は?」

そうその人物は、私に名前をくれた子。豹矢だった。

『見つけた、もうあなたを放さない……』

と言う一人の少女の声。

そしてその少女は、優菜の腕をつかみ……。

「はっ！」

と目を覚ます。

目覚めたのは……少女の脇。

いや待ておい、何で脇に挟まれて捕まっちゃってる感じなの、俺？

だが次の瞬間その少女は、自らの黒い羽で優菜を攻撃し始めた。

つまり、こいつは、敵!?

そう結論付けた俺は、その少女の顎をバリスタのストックで殴りつける。

「ウグツ…ツ！」

と少女がひるんだ隙を狙って少女の腕の中から抜け出す。

しかし抜け出した先は、空中。

このままだと自由落下して昇天してしまう。

そこで、背中に翼が生えたようなイメージをする。

すると、雷の翼が俺の背中から形成される。それを拡げてボバリング。

どうにか地面に衝突するのを防ぐ。そして、一気に上昇。その最中、

「バリスタ！モード、デュアルソード！」

と俺が言うと、

『リクエスト認証。モード、デュアルソード』

とバリスタが返答したと同時に、G-11を模したバリスタが二振り
の機会装甲形双剣へと姿を変える。

横幅15cm刃渡り30cm全長50cmぐらいの双剣だ。

刃には常に電気が流れている。大きさは1000V以上。

その刃で一気に少女へと斬りかかる！

画。飛行速度では少女のほうに分があり一向に刃は届かない。

(どうする……あんなに動かれたら砲撃は、当たりそうにねえし。こ

のままだと絶対攻撃なんて…)

と考えていると、

(刃を、飛ばすなんてどうだ!?)

と思いつく。

そういえばこのモードには必殺技となるロードドライブが登録されていなかった。

なら…

「ロードドライブ登録！空破斬！」

『ロードドライブ登録。デュアルソードモード。01クウハザン！』

と少し空破斬の部分をカタコト気味にバリスタが答える。

そして一気に双剣を少女に向けて振りまくる。

すると、本体の刃とは別に雷の刃が発射された。

―ズガアン、ズガアン、ズガアン、ドオン、ドオン！

と、四回振るった後、二回少女に当たる。

(やったか!?)

と思ったが少女は依然空中で立っていた。

しかし、少し苦渋の色を顔に浮かばせていた。

「…あなたは一体何者？」

と、その少女は尋ねてきた。

「あいつの同居人」

と、俺は夕菜を指差して答える。

ちなみに夕菜はこちらに気づいて今飛んできている。

「そう円環の理の…。いえ、壊れた概念の」

「何？」

と俺は聞き返す。

すると夕菜が到着して、

「あなた！これ以上豹矢に手を出さないで！」

と声を荒げて少女に言う。

ウワオ…すごいキレてる。

そんな心配だったのかと、ちよつと申し訳ない気持ちになる。

「あなたには聞いていないわ。壊れた円環の理にわね」

と少女が言い返す。

「壊れたってどういうことだ…?」

と俺は聞く。

「簡単なことよ彼女は円環の理としての機能が死んだ、いてもしょうがない存在なのよ」

と、少女は告げた。

その瞬間夕菜はとてもおびえたような表情になった。

それを見た俺は、こう言い返した。

「ぎっけんじゃねえよ！ここに存在は、意味を探すためにいるんだよ！それをお前が否定するって言うんなら、ぶっ飛ばしてやる！夕菜の存在を否定したことを後悔させてやるぜツ、コノヤロオオオツ！」

豹矢の怒りの声を聞いた私は、自分の身が解き放たれる感覚に陥った。

—なんでだろう…?

ああ、そうか。認められなかったんだ、自分自身の存在を…。

そうわかった瞬間、もどかしくって、でも甘い感覚が私の心を満たした。

何なのだろう、コレは…?

「ドリヤアアアア！」

と、俺はバリスタを振り回す。

次の瞬間、バリスタが少女の隙に入る。

「！」

「とつたッ！」

と言った瞬間だった。

「豹矢君ッ！」

と言うまどかの声によって動きが止まる。

見ると、まどかとさやかがいた。

そして少女のほうに振り向きなおすと、そこに少女はいなかった。

そこには、フワフワと黒い美しい羽が一羽落ちていた…。

T e a t i m e

戦いの後、まどか達と連れていかれて、金髪の少女の家である、とあるアパートの一室に今はいる。

そして今、俺の目の前には紅茶とシフォンケーキが置かれていた。三角形のテーブルを囲むように俺、優菜、まどか、さやか、そして金髪の少女こと、バマミさんが座っている。

マミさんは、今優菜の話聞いていた。

そして話が終わったのか俺の方を向いた。そして、

「優菜さんが円環の理から分離した1人だっという事と今は普通の魔法少女だということは解ったわ。でも百咲君は一体何者なのかしら？」と俺に聞いてきた。

すると俺ではなく、

『それについては私から説明いたします』

と、バリスタが答えた。

「ちよつ、バリスタ!？」

と俺が慌ててバリスタを止める。

「バリスタ?」

と、マミさんが聞く。

すると、不可視状態を解いたバリスタが現れる。

「「「えっ!」「」と、まどか達が驚く中バリスタは、

『申し遅れました私は、special weapon type living thing 通称バリスタと申します』と、自己紹介をした。すると…

「「「しや、喋ったー!」「」

と、まどか達は驚いた。

「あつ…そうそう、こいつAI（人工知能）と、ボイスシステム持つてるから」

と、俺は慌ててバリスタについて説明する。

「AIなんて初めて見たよー!」

とまどか驚いているが、他の皆は、驚きすぎて何も言えないようだ。

そして一早く気が元に戻ってきたママさんが、

「えーっと、そのバリスタっていう百咲君の武器は、喋る武器って考えてもいいのね？」と聞いてきた。

「あつ、はい。そう考えてください」

「なら、百咲君じたいは普通の人って考えてもいいのね？」

とママさんが聞くが、バリスタが

『いえ、確かに私も特異な存在ですがマスターである百咲さんは、とても特異な存在です』と否定した。

「えっ？それってどう言いうことかしら？」

と、ママさんが聞く。

そしてバリスタはこう答えた。

『マスターは、異能の使い手。通称 s p e cホルダーという存在です』

「「「いつ、異能!?!」」」

と、またまたまどか達は驚いた。

「異能って事はアレよね、いつも寝ているあの豹矢が超能力者って事よね!?!」

と、さやかが驚きながらも聞く。

「っておいコラ、いつも寝てるってなんだよ。」

「まっ、そんな所だな」

と、(本音は言わずに) とりあえず答えると、

「あのさー」

と杏子が話に入ってきた。

「そもそも、豹矢は能力をどうやって手に入れたのさ」

杏子のその言葉を聞いた時、俺は苦しい記憶を思い出した
だけど…

あえて俺は、

「そうだなー」

と、能力を手に入れた時の話をする事にした。

あれは、俺が10歳の時だった。

父と母と俺の家族総出で、見滝原から遠く離れたショッピングセンターに出かけた時だった。

突然店内にテロリストが現れた。

その時とつきに父は、俺を店員専用のスペースとでも言うべき場所に隠した。

そして…

タタタタンツ！という音と共に父と母は、死んだ。

流れる血、血を流す両親、そして…全ての元凶、テロリスト。

その全てを、目が、脳が、捉えた時だった。

「あああああああああ！」

と俺は絶叫した。

そして、俺は…

(殺す、殺す殺す殺す殺す、こいつら全員、殺してやる！燃やしてでも感電死でも何でもいい！ぶっ殺してやる！)

そう心の中で強く思った、その時だった。

ズバチイイイ！という激しい音と共に、テロリストは死んだ。

そして最初は何が起こったのかわからなかった俺は、ふと身の回りを見ると。

紫電がほとばしっていた。

その後は良く覚えていない。

ただ、テロリストは全員死んだらしい。

「という訳で俺は能力を手に入れたのさ」

と、俺は話を締めた。

そしてふと見ると、まどかは泣き、さやかと優菜は俯き、杏子は後ろを向き、مامィさんは悲しい表情をしていた。

「色々だいへんだったんだねびようやぐん！」

「そんなことが……」

「豹矢…」

「…悪かったな。事情も知らずに聞いてしまった」

と、まどか、さやか、優菜、杏子は口々に話す。

そしてمامィさんに至っては、

ギョツと俺を抱きしめてきた。

「っかمامィさん!?胸が、でっけー胸が当たってますけど!?!」

「あ、あのー」

と、俺が声を掛ける。すると、優菜達はハツと俺の方を向き、マミさんは我に帰り、バツと俺から離れる。

「ごめんなさいー」

「い、いえ」

と、俺とマミさんはなんだか気まずくなる。

ふと優菜の方を見ると、何故か優菜は不機嫌そうな顔をしていた。

「どうした優菜？なんか機嫌悪そうだけど？」

「べっつにー？」

何故だろうと私は考える。さっきのマミさんの行動に対して私は何故かムカツとした。

というより、何故か豹矢に対して私はムカツとした。

あーもう何なのこの気持ち!?

豹矢が話しかけてくると何故か緊張するし。

でも話が弾むととつても楽しいし何だか嬉しいし。

まずもってこの気持ちも何か変に心地いいし…。

もう、本当に意味わかんない!

どうすればいいの、この気持ち!?

話が終わって家に帰ると、さすがに優菜の機嫌も治っていた。

俺はあの後にまだか達と話した事を思い出した。

「そう言えば、優菜さんも百咲君もなかなかの力はあるのよね？」

「ええ、まあ」

「そこで、2人に私達の魔獣退治を手伝って欲しいの」

「魔獣？えっと、それってなんですか？」

と俺がマミさんに聞く。すると、

「昨日私を助けてくれた時に出会ったあの化け物のことよ」

と、優菜が答えてくれた。

「ああ、アイツの事か」

「そう、アレを私達は魔獣って呼んでいるの」

「そうなの。そして魔獣達は人々に不幸と絶望をまきちらすの」
「えっ?」

と俺はママさんのその一言に反応した。

正直に言うと、あの魔獣とやらの存在的スケールがデカすぎて驚き、つい言葉が出てしまった。

「そして、その魔獣を倒して人々に夢や希望を与えるのが私達、魔法少女なの」

と、今度はまどかがはなしてきた。

「スケールデカすぎじゃね?」

と俺がついに我慢ならず言うと、

「でもこれは本当の事なの」

とママさんが言ってきた。

「正直に言うと、とても危険だし」

とさやかが言う。

けど、俺は

「イイぜ。俺は」と答えた。

「豹矢!」

と優菜が言うが、その優菜にまどかが、

「優菜ちゃんもやろうよ!」

と言ってきた。

「わ、私!」

「そうだよ!皆もいいと思うよね!」

とまどかが言うと、

「アタシはイイぜ」

と杏子が

「私も杏子とおんなじ」

とさやか

「私も良いと思うわ」

とママさんが賛同する。

そして当の優菜も

「ここまで言われちゃね……」

という事で、俺と優菜はまどか達の魔獣狩りの手伝いをする事になった。

夜になり、俺と優菜は夕飯の俺お手製のクリームシチューを食べていると、

ーピンポーンーとチャイムが鳴った。

「はい」と俺が出ると、

「ヤッホー」と言う、美玲姉が来ていた。

「どうしたのさ？こんな夜に」

「実はあの子に渡したいものがあってね」

「あの子……。優菜の事？」

と俺が聞くと、

「名前付けてあげたんだ。優菜ちゃんか。良い名前ね」

と美玲姉は嬉しそうに言ってきた。

俺は優菜を呼ぶと、優菜に美玲姉の事を紹介した。

そして美玲姉は紙袋を優菜に渡して「じゃーね」と言っただけで帰って行った。

そして食後。

優菜は少し緊張した面もちで紙袋を開けた。

すると、

「あつ……。ー」

「おっ」

中には優菜の身長にピッタリの可愛らしい服やスカートなどの衣類が入っていた。

真夜中、黒い翼を持つ少女がとあるビルの屋上にいた。

その少女が思うのはいっだけ。

「まどか…安心して。わたしは貴女を守ってみせるから…」

そう呟いた少女の右手には、黒い外装のような物に囲われた紫のジュエルのような物があった。

翔章 噛み合うはずのない歯車

Start New Days

警視庁公安部公安第五課未詳事件特別対策係、通称未詳。

この主な勤務内容はspecホルダーの保護、またはspecホルダー絡みの事件の捜査だ。

specホルダーである豹矢もここに保護された。

21. 5階に部屋があるこの刑事は2人しかいない。

名前は瀬文焚。

熱血漢で、元はSIT（捜査一課特殊捜査班）の出身だが、とある事件がきっかけでここに来た刑事だ。

「よつと」

と、瀬文は壁に掛けられている自分の名前が書かれた小さなプレートを裏返す。こうして自分が出勤した事を示す。

その左隣には囑託係長である野々村光太郎の札がある。

自分の席に瀬文が座った時だった。

ブブブブツ、と瀬文のスマホが震える。着信だ。

見ると、豹矢からメールが来ていた。

「どうしたんだ？」

と呟きながら見るとそこには、

『無事入学』というタイトルと共に、優菜の制服姿の写真が送られて来ていた。

市立見滝原中学校、

ここは俺が通う学校だ。

あの悪魔の様な装いの少女が俺と優菜の前に現れてから一週間がたつ。

今、俺は絶賛登校中な訳なのだが、その隣に…

「す、凄い人」

と人の多さに驚く優菜がいた。

何故優菜が入学する事になったのかと言うと、端的に言えば将来、優菜が社会の中へと旅立っても大丈夫なようにするためである。

まあ、そういう訳で一緒に登校していると

「おはよ〜!」

と、まどかがやって来た。その後ろには、さやかと杏子がいた。

「よッ」

「おはよう、まどか」

と俺と優菜は返事をした。

「制服似合ってるね、優菜」

「どーよ、調子は?」

とさやかと杏子は口々に話す。

「おいおい、そんな一気に言っても優菜が困るだけだろ?」

と俺は言うが、

「いーじゃんかよ〜」

と杏子が言う。まあ、今日は多分何事も起こらないと思うし、まあいいか。

朝のSHRが始まった瞬間、担任の早乙女先生がこんなことを言い出してきた。

「唐突ですが皆さん!目玉焼きには、ソースですか?お醤油ですか?

はい、中沢君!」

「えっ、ど、どっちでもいいかと…」

と、中沢は突然の質問に驚きながらもそう答える。

そして先生は、

「そう、その通りです!お醤油でも、ソースでもどちらでもいいんです!なので女子の皆さんはお醤油じゃないと食べられなくいい、とかほざいてる男子とは付き合わないように!そして男子は女子の手料理に口出ししないように!!」

と言ったが、要は、早乙女先生また破局、と言ったところだ。

そしてきれた息を整えた先生に

「はい、それから転校生の子を紹介しま〜す。えん、じゃなくて、まわりか。円さ〜ん!」

と言われたのち、優菜が少し緊張した面持ちで教室の中に入り、黒板に『円優菜』と自分の名前を書いた後、こう言った。

「えっと、は、初めまして。円優菜です。えっと、その、よ、よろしくお願ひします！」

昼になり、屋上で俺、優菜、まどか、さやか、杏子はマミさんと落ち合い、一緒に昼食を取っていた。

さやかが、

「それ豹矢の手づくり？」

と、優菜に聞いてきた。

「うん。登校までのたった少しの間で私と自分のを作ってたの」

「ひゃー、豹矢の将来は専業主夫か!」

「ンな訳ねーだろ」

と俺はさやかにツッコむ。

俺、優菜、まどか、さやか、マミさんは手づくりのお弁当（優菜のは俺が作った）。杏子はコンビニで買ったおにぎりやサンドウィッチだ。

正直、一緒に食べることをまどかに提案された時は、俺だけ男子で残り全員が女子という状態は大丈夫なのか?と思ったが、いざ始まってみると以外にも楽しい。

女子とこんな感じで昼食中に話すことは今までなかったのととても新鮮な感じだった。

授業が終わり、俺はまどか達と共にマミさんと合流する。

これからは魔獣探しの時間となるが、そもその前提として

「どうやって探すのさ?」

と俺は優菜に聞く。

すると、カバンから一つの宝石のようなものを取り出した。

「これは…?」

「これはソウムジェル。私たち魔法少女の魔法の源。これが強く光ると魔獣が近くにいてることが分かるの」

と優菜は言う。

すると、

「「「「あつ!!」」」」

と俺たち六人の声がハモる。

優菜のソウムジェルが光っていた。

「近い」と言い、優菜が走り出す。それに続いて俺たちも走った。

着いたのはとあるビルの建設現場。

そしてその屋上には一人の女性がいた。

すると次の瞬間、落ちた。自分の意思で。

「危ない!!」

と言ったと同時におれは雷の翼を展開して飛び、どうにか女性をキヤッチする。

地面に戻り女性を下ろすと首元にアザがあるのに気がついた。

するとそれに気がついたママさんが

「魔獣の甘噛みね」

と言った。

「魔獣の甘噛み?」

「人々の心が弱ったところを狙って付ける魔獣の技のようなものよ」

「って事は」

「跡も新しいし、とても近いところにいるわね」

そしてビルの中に入ると、結界の出入り口ともいえるものがあつた。

大きさは人一人なら十分すぎる程の大きさだ。

「ここが魔獣の結界の入り口。この先に魔獣はいるわ」

とママさんが言う。

そして優菜たち魔法少女組が入った後、俺はバリスタを取り出す。

『準備はいいですか?』

とバリスタが聞いてきた。

「正直言うとなスゲエ緊張してるし、少し怖い」

と俺は言う。

『ですがそれ以上に何か思うことがあるのでししょう?』

「ああ。こんな所でビビってたらいつを守る事なんて出来ない。

だから俺は行く。あいつらの隣に意地でもいつづけてやる」
『なるほど』

とバリスタは言った。

そして一拍おいてこう言ってきた。

『改めて聞きますが、準備はいいですか？』

「モチのロン」

と俺は応え、結界の中へと入って行った。

俺が魔獣の結界の中に入るのは多分三度目となるが、ヤツパリこの独特な世界観には慣れない。

「おっそいよ、豹矢君」

とまどかが魔法少女の姿（フリフリ）で言ってきた。

「ワライ、バリスタのセットにちよつと時間がかかってな」

「それにしてもちよつと遅くない？」

と、まどかと同じく魔法少女の姿（白のワンピースの様な格好）をした優菜が言ってきた。

「まあ、そんな事は置いといて」

「そんな事!？」

と俺と優菜が話していると、

「お、キタキタ」

と、さやかがママさんと杏子と共にやって来た。

そして杏子が

「あれが魔獣だぜ」

と言い、顔を向けている先には。

絶望と悪夢の象徴とも言える存在、魔獣がいた。

「前にも見たけど、改めて見るとカオスすぎるな……」

と俺は言う。

前方50mから100mくらい先にいたその魔獣は、右手に竹刀らしきものを持っていた。

大きさはだいたいビル四階ぐらいの高さ。

その外見はこの世ならざるものという言葉がピッタリあう姿をし

ていた。

その外見に思わず俺は、

「キメエな……」

と呟いてしまった。

「そんなことで怖がっていたらダメよ」

とつい呟いてしまったしまった言葉にマミさんが注意する。

そして魔獣が俺たちに気がついた。

「皆、行くわよ！」

というマミさんの言葉と同時に俺たちは空へと飛んだ。

First hunt & heat love?

今回の魔獣狩り…もとい魔獣退治はまず杏子、さやかのクロスレンジチームがまず魔獣に奇襲をかける。

「杏子！」

「わーってるー！」

と二人は魔獣の元へといつきにかけて行き、

「ズシヤッ！ズシヤッ！」と杏子の槍とさやかの剣が魔獣を切り裂く。

「グオオオ！」と魔獣が二人に気がつき二人に攻撃を仕掛けようとする。

「させつかよー！」

と、俺はバリスタのトリガーを引き絞り雷撃弾を連射する。

「ナイス！」

「やんじゃねーか！」

と二人が俺に声を掛ける。

しかし、「油断は禁物よー！」と飛んできたマミさんに注意される。

「「はいー」」

と言って再び緊張感を持つ。

すると魔獣が竹刀を振り上げた。

慌てて俺達はその場から退避する。

その後「ストオオオオンッ!!」

と言う轟音がに鳴り響きながら魔獣の竹刀が地面に直撃する。

その跡にはクレーターのような大きな穴があった。

「狂ってんだろ…あんな破壊力」

と俺は呟いた。

「でも、夢の中の《ヤツ》に比べたら…」

と俺はさらに呟く。

最近よく見るのだ、とある夢を。

魔獣によく似た、しかし何かが違う存在が魔法少女達に時に倒され時に魔法少女を殺し、そして、そんな時間が繰り返される中で、誰か

が突如として優菜になる。

そしてさらに時が立ち、一人の黒髪のロングヘアの少女があの悪魔に…。

いや、何考えてんだよ。

そう思い俺は頭を横に振る。

今はあの魔獣の処K：じゃなかった、退治が最優先だ。

そう思い、再びバリスタを構える。

ふと周りを見ると、黄色いリボンが魔獣の周囲を囲み杏子の編み込み結界が魔獣の体を拘束していた。そして、

「今よ！鹿目さん、円さん、百咲君！」

と言うマミさんの声が響く。

そして、

「ハアッ！」とまどかと優菜の魔法の矢の雨が魔獣を貫き。

「ライトニングスマッシュャー！」

と言ったと同時にバリスタから発射された大型雷撃砲が魔獣を吹き飛ばした。

「ナイス、優菜」

「そっちょこそ」

と俺と優菜は勝利を喜ぶ。

まあ、初退治にしてはいい方だったかなー、と思う。

「さすがはお二人さん、お熱い事で」

とさやかと言ってきた。すると……

「は、はあ!?お、お熱いって私は別に……」

と言いながら優菜がゆでダコのように顔を赤くしていく。

「どうしたんだ?」と思い優菜のデコを触る。

「ヒヤッ!?ひよ、豹矢!?!、いいいい一体!?!」

と、優菜が言っているが何をしているかと言われても、熱測っているんですよとしか言いようがない。

あ、そっか。優菜は神様みたいな存在だったから熱なんて知らない

かったのか。

そう結論づけて俺は優菜の熱を大まかに測るが、特に異常は無い。
一体どうしたってんだコイツ？

(キヤアアアアツ!?!ひ、豹矢な、な、な、な、な、な、な何してんのよ!?)

と、私の頭の中は暴走していた。

理由は単純、豹矢におでこを触られたから。

(って、何でこんなに混乱してるのよ私は!?!落ち着け、落ち着くのよ私!)

と思うけど暴走した思いは止まらない。

すると、ースツ、とひの手が私のおでこから離れた。

(あ、)

と私はなぜか残念に思えた。

暴走は止まったのに、何でだろう。

と言うより、この前から私はどこかおかしい。前にمامィさんが豹矢に抱きついた時(مامィさん曰くその時、昔の自分みたいに見えてついやってしまったらしい)何でかイラついた。

やっぱり本体から離れたせいで、どこか異常きたしているのかもしれない。

けど、私はなぜかこの心情の状態については問題とは思ってなくてむしろ正常だと思っている。

この前、美玲っていう人と二人になった時に聞いたら笑って「自分で気づいた方がいいよ」って言われたし。

っていう事は私は正常っていうことなんだ。でも自分で気づいた方がいいってどういう事だろう？

ふと豹矢がそっと離れて行くのが見えた。

その時なぜか私は豹矢にもたれかかった。

「どうした？」

と、豹矢が聞いてきた。

その時、とっさに私はこう言った。

「何か、疲れた…」

(やれやれ、やっぱり円環の理本体から離れたから力も弱くなってんのか?)

そう思いながら、優菜を背中におぶっている俺は帰り道を歩いていった。

すると、ーピロロンとメールが届いた。まどかからだった。

内容は『明日休みだし、中沢君達も誘って遊ばない?』

と言う内容だった。

まあ、まどかは俺が転校してきた時に色々世話になったし、いつか。

そう思い俺は中沢達にアポを取るためメールをした。

「これでよしと。豹矢君くるかな〜?」

と私は思っていました。

豹矢君が転校してきた時、私はまだアメリカから帰って一週間も立ってなくて色々大変だったけど、そんな時「転校生仲間」という感じで、豹矢君は私と色々話しかけてくれました。

その時私は学校の事を豹矢君に教えてあげていたのですが、この時の私は友達の事とかですごく不安でした。でも豹矢君のおかげで今では、さやかちゃんや杏子ちゃんと仲良くなりました。

でもある時、ふと豹矢君と話すと突然なぜか異常な程に豹矢君の事を意識していました。

そして少ししたって気がつきました。

そして、今日に至る間に優菜ちゃんというライバルが現れました。

もとは円環の理だったらしいのですが、何かあつたらしく本体から離れたらしいのです。しかも魔獣の攻撃を受けてボロボロになったらしいのですが、その時に豹矢君が現れてバリスタさんと一緒に(?)魔獣を一撃で倒してしまつたらしいのです。

まるで、ヒーローみたいな話ですが豹矢君は「たまたまだし、あの時は本当は自分の事で精一杯だった」と言っていました。

でも豹矢君は満更でもない感じで話していました。

「そういえば、と思い私は髪を結んでいた赤いリボンをふとほどこいて、そのリボンを見ながらとある事を考えていました。

このリボンは元々、私の物ではありません。

暁美ほむらさんが渡してくれた物です。

「暁美さんは何であんなことを言っていたのかな。

そう思いながら私は手の上のリボンを見ました。

C o u n t d o w n (r e a d y)

(ええええええええ!?)

と私、鹿目まどかは驚いていました。

何故なら…。

「あ、えーつと悪い。中沢達に連絡したんだけど、どうしても予定が付かないって」

と言う豹矢君が目の前にいました。

そう、遊びに行こうと豹矢君達を誘ったのは良かったのですが、何と豹矢君だけが来ていたのです。

(ら、ラッキーなのはラッキーだけど、きゅ、きゅ、急すぎて心の準備してなかったよー!!)

と私は心の中で叫びます。

その時、ーゾクツッ!、と寒気がしました。

…気の、せいかな…?

それよりまず私は豹矢君に話しかけます。

「と、とりあえず行こっか」

「んー、じゃどこ行く?」

「映画館とか行かない?」

「お、良いねえ」

(むー…)

と私、円優菜は今とある部屋でもややよとした気持ちを払拭できずにいた。

原因は単純、私は警視庁という所の公安第五課という所にいるのに対し、豹矢はまどかと遊びに行っているのだ。

今日私は美玲さんに豹矢の持つ能力ーSPECと言うらしいーとは何なのか。それを聞きに来たのだ。そして、それと同時に私の持つ

魔法とは魔法少女とは何なのかと言うのを説明に来たのだ。

「お待たせ」

という言葉と共に美玲さんがやって来た。

「あー、それじゃまず私達の持つSPECについて話すね」

と、始まった美玲さんのSPEC講義は10分くらいかかった。

話された内容を纏めると、まずSPECは人の強い思いが脳のリミッターを破壊し脳の能力を100%使用している。

また、SPECを持つ人の事をSPECホルダーと言いその人たちのSPECはその時思った強い思いに左右される。

SPECを使う際には何らかの動作を用いる事が多い。(豹矢ならばリスタの起動とそれとは別にもう一つあるらしい)と言う事らしい。

次に私も魔法少女について説明した。

魔法少女は強い願いと契約によってなれると言う事。魔法少女の武器は彼女達の願いに左右される事。魔法少女になる際はソウムジェルを用いる事。ソウムジェルは使用するにつれどんどん黒く濁り、ソウムジェルが真っ黒になると人の手に負えない存在、「魔女」になってしまう事、その魔女を産み出さない用に私(円環の理)が濁りきったソウムジェルを持った魔法少女がいた際ソウムジェルを浄化し「導く」事。また、魔獣を倒した時に出る光はソウムジェルの濁りを消す事が出来ると言う事を話した。

話を聞いた美玲さんは

「ナルホド、よく分からない」

と言った。

「ガクッ!と私は椅子に座りながら転びかけると言う荒技をしそうになる。

その時ふと思った。

「私、こんなにも心に余裕があったのって、初めてかも…」

今まで私は多くの魔法少女を導いてきた。だけど導くたびに私の中で大切な何かがどんどんすり減っていき、その度に心から余裕がなくなっていく。

けれどここで過ごすようになってからは大切な何かが私の中で元に戻っていく感覚があった。

映画を見終わった後私と豹矢君は昼ごはんを食べる事にしました。やってきたのはとある洋食店、ここはフレンチトーストがとても美味しいのです。

「どーしよーかなー、まどかはもう決まった？」

「私もちよつと悩んでる…」

数分後、私達はフレンチトーストを頼む事にしました。

それよりも、正直に言うのと豹矢君と二人きりってというのはとても恥ずかしいです。

今だって相当勇氣出して話してますし…。

うー、ムシヤクシヤするけどなんだか心地良い…。

(うーん…)

と、俺こと百咲豹矢は今ちよつと悶々としていた。

なぜかって、そりやまどかと二人で色々と遊びまわっているからだ、これ傍目から見たら完璧にデートだよな…。

ちよつと気恥ずかしい。

と言うより俺の服は白のTシャツに黒のジーンズというラフな格好に対し、まどかは桃色のカーディガンとか白のフリフリのスカートとか、もう完全にオシヤレしてます。オシヤレ番長じゃん。

つーかやっぱ女子と二人きりってやっぱ気まずいわ。うん。こんな事ならバリスタの電源落としておくんじやなかったなあ。チツキシヨー！

私、円優菜と美玲さんの話はいつの間にもやら日々の事になっていった。

ちなみに話の中でわかったんだけど、美玲さんは学生で、芸大というところに通っているらしい。

そして美玲さんがこんなことを話して来た。

「ねえ、ぶっちゃけ豹矢の事どう思ってるの?」

「ブブウウーツ!と、その時口に含んでいたお茶を私は吹き出してしまった。」

「な、なななな何言ってるの美玲さん!?!」

「そんな動揺しなくても良いのに!」

「ご、ごめんなさい!」

「良いのよ別に。で、どうなのよ?」

どう、とはどういう事だろう。私にはよくわからない。けどとりあえず思っている事は話そうと思った。

「豹矢には感謝で一杯です。私は今まで円環の理としてしか生きていなかった、それが私の存在価値だと思ってました。けど、豹矢のおかげで私は新しく人として生きる事が出来る。円環の理じゃなくて私という、円優菜という一人の人間として見てくれている。そんな事してくれたのは豹矢が初めてでした。だから、その…えっと…」

と、私は途中から歯切れが悪くなる、正直に言うところの先の内容は何を言おうとしたか考えてないのにもし言うのならそれはとても恥ずかしい。

そんな私の思いを知ってか知らずか美玲さんは。

「良いよ、まだそんなに話さなくても」

と言ってくれた。

なんか顔が熱い…。

トイレに行って顔洗ってこよう…。

その選択が後にあんな事になるなんて…。

ーピロロロロロロッ!

ーピロロロロロロッ!

と、ふと俺の携帯が鳴る。

ーピッ!

と着信が出る。

『もしもし!?』

と、出て来たのは美玲姉か…。

何やら慌ててるようだ

「もしもし、どしたの?」

『大変よ! 優菜ちゃんが居なくなつた!』

「はあ!?」

Countdown (3)

「い、いないってどういう事だよ美玲姉!?!」

と、俺は電話越しに言う。

『そ、それが、優菜ちゃんがトイレに行くって言った後にしばらくして
も帰ってこないからおかしいなあ、って思ってたトイレに行ったら返事
がなくて……。それで無理矢理こじ開けたらいなかったの!!?!』

「どうすんだよ、優菜の奴、携帯持ってないのに……!!?!」

『ど、どうし……』

と、突然、美玲姉の声が切れる。

「どうした、美玲姉!?!」

と、俺は美玲姉に言う。

『もしかしたら分かるかも、優菜ちゃんの居場所』

「!?!?……どう言う事!?!」

『私のSPECが最近少し強化したの知ってるでしょ、昔は物や人か
ら思念を読み取るぐらいだったけど、今は読み取った人物が、今どこ
にいるのかも分かるって事。もしかしたらそのSPECを使えばワ
ンチャン分かるかもしれないって事!』

「な、なら今すぐに!」

『……確実に分かるとか分からないけど、やってみる!!?!』

「ダメモト上等!頼むぜ美玲姉!!?!」

と、俺は美玲姉に望みを託す。

数分後……。

『わかった!優菜ちゃんの居場所と誘拐した犯人!』

と、美玲姉の歓声が上がった。

「マジか!?!?ば、場所と名前は!?!」

『場所は見滝原中の屋上!名前は……!』

「あ、あれ？」

と私は目を覚ます。

そこは学校の屋上だった。

ふと周りを見渡す、と……

「あ、あなたは……！」

と、私は声を上げた。

すると、私の目の前にいた人物否、少女は

「ごきげんよう、円環の理。いえ、今は円優菜さんだったかしら？」

と答えた。

「何のつもりよ、自称『悪魔』さん」

と私は少女に問う。

すると少女はこう答えた。

「簡単よ、あの子を救うためにあなたには消えてもらう。ただそれだけよ」

「何よそれ、本名さえ教えてもらってない人間いきなり死ねだなんてまっぴらごめんだわ」

「ああ、そういえば本名を言ってなかったわね。いいわ、それくらいなら教えてあげるわよ。私の名前は……」

「曉美、ほむら？」

と、俺は電話越しに言う。

『うん、曉美ほむらちゃん。豹矢と同じ見滝原中学校に通ってる子。その子が誘拐した犯人!!?』

「で、でも何でその子が誘拐なんか……！」

『分からない。けど、それとは別でもしかしたらの可能性があるの』

「……もしかしたらの可能性?」

『その子が『魔法少女』かもしれないっていう可能性』

「魔法、少女……!?」

その言葉を聞き俺は絶句する。

魔法少女が魔法少女を誘拐する。

しかもよりにもよって円環の理の一部であった優菜を。

「ん?でも、何で優菜を狙って攫ったんだ?」

と、俺はふと疑問を言った。

『わからないけど、でも……』

「でも?」

『執着心って言うのかな?そんなのがイメージで見えたんだよね』

「……」

「執着心?何の?」

『愛?』

「愛……?」

『そう、愛がある人特有の執着心が見える』

「で、なら、その愛は一体誰への……?」

『……?ちよ、嘘でしょ?』

と、通話中に突然美玲姉が驚く。

「どうしたんだよ、美玲姉!?」

「曉美ほむら……ね。分かったわ。ほむら、なら一つ聞かせて?何で私の命を狙うのかの理由を」

と、私は聞く。

「簡単なことよあの子が再びあなたという存在にならないように、あなたに取り込まれないように。その為よ」

と、ほむらは答えた。

けど、私の中では一つ疑問が残っていた。

「あの子……?一体誰なの、その子は?」

と、私はほむらに聞いた。

するとほむらは呆れたように

「あなたなら薄々気づいているんじゃないかしら？」

『ほむらちゃんが、愛していた相手があったわ。ほむらちゃんが愛している相手それは……』

「私が助けようとした子の名前は……」

『まぶか』

Count Down 2

「どう言うこと……?」

と、私は率直な感想を述べた。

まどかを救うのが悪魔の目的?

それがなぜ私と関係があるのだろうか。

「……貴女は覚えていないでしょうけど」

と、悪魔が口を開いた後、こう言った。

「円環の理という存在は、まどかの願いから生まれたのよ……」

ー訳が分からなかった。

まどかの願い、つまり魔法少女になるために願ったことが私を生み出すこと?

一体どういう事なのだろう。

じゃあ仮にそうだとしても、なぜまどかは私を生み出したのだろうか……。

謎は尽きない。

そもそも私という存在はまどかが生まれるよりずっと前から存在していた。それなのに私を創り出した存在はまどかだった?

まどかの様な魔法少女を導くための私が魔法少女であるまどかから生まれた?

すると、

「語弊があつたわね」

と、悪魔が口を開いた。

「正しくは貴女とまどかは最初は文字通りの『一心同体』だったのよ、それを私が分離させたのよ」

悪魔の話は続く

「貴女が生まれた時、世界は作り直され新たな定義の元で世界は動き

始めた、けれど私が貴女とまどかを分離させた時、私は悪魔となりそのとき得た膨大なエネルギーを使って世界をさらに作り直した」

「そ、そんなふざけた話……」

「ふざけてなんかいいわ。それに貴女が一番よく知っているはずよ。魔法少女は願わなければ生まれないことを」

そんな事は言われなくても分かっている。分かっているけど、予想の範疇を大きく超えていた。けれど、

「けれど、貴女は何でそもそも悪魔なんかになれたのよ!?!?」

と、私は言う。

すると、こう言った。

「私は、貴女が干渉できないところで『魔女』と化したのよ。それも、ソウムジェルの中で」

「な、何ですって……?」

と、私は絶句した。

魔女と化したのも驚きだったけど、それ以上に『ソウムジェルの中で魔女化した』と言うのには驚いた。

「そして魔女化した私は美樹さやか、バمامィ、ベベ、佐倉杏子、そして、まどかに救われた。そして貴女がきた。けど、その時まだ私の中には大量の膨大なエネルギーが残っていた。そして私はそれを使ってまどかを救い世界を作り直した」

……そんな、そんな事があっただなんて。

その言葉を呟く事が出来ないほど私は驚いた。

「話を戻すわ」

と悪魔が言う。

「だけどあの日、この世界で初めてまどかと出会った日、あの子はまた貴女と一つになりかけた。その時は私が引き戻したけど、これ以上まどかが二度とまた貴女と一つにならない様に見張っていた。けれどもある日貴女が突然円環の理から分離した、そしてその時私は貴女を仕留めようとした、まどかに貴女が接触し再びまどかが円環の理にならないように。けれど魔獣に、それも二体の魔獣に邪魔された。そのうちの一体は弱った貴女を追撃したわ。けれど、さらにそこで「俺が

現れてバリスタで魔獣ハントをしてしまった……、つてか?」……!!
?」

と、悪魔と私は驚き声が聞こえて来た方を見る。

そこには、

「よう、無事か?」

『ご無事なようで何よりです』

と言う、豹矢とバリスタが居た。

「……っにしても、そんなことが起こったとはな。二度にわたる世界の作り直し。しかもそれをした張本人たちは人外の存在になったと。ま、それが真実だろうと今の世界でお前がやった事と言えば、その後俺を無力化した上で、優菜を抹殺しようとした計画し、あの日マミさんとやんちゃした後優菜を襲撃した。だけど予想外だったのが俺が予想以上のスピードで目を覚ました事、そしてまどかの乱入。その二つが起こって計画はオジャンになった、そこで今度は優菜一人を狙って今回の犯行に及んだ。つてところか?…… 『元時間遡行の魔法少女』 暁美ほむら?」

と、豹矢は淡々とやっているけど私には分かる。未だかつて無い程に『キレている』。

「……どうして、それを?」

と、悪魔が、暁美ほむらが言う。

「俺の知り合いに情報通がいてな、その人に教えてもらった」

「……情報通?」

と、私は思わず呟いた。

「美玲姉のこと。心理系のSPECホルダーなんだよ」

と、私に言った後豹矢は悪魔に顔を向き直す。

「さて、どうする? 今謝るなら50%オフの半殺しで許してやるけど!?」

段々と豹矢の語気が荒くなる。

「魔法少女に、それもその範疇を超えた私が貴方に謝る?……むしろ

貴方がこの話に割り込んできた事を謝るべきじゃないかしら？」

と、暁美ほむらが言った直後だった。

ー「ビキッ！」と、何処からか音がした気がした。

「……ほーん。わーった、よく分かったぜ、友情こじらせ粘着ストーカー女……！」

と、豹矢が言い返した時だった。

ー「ビキッ！」と、何処からかまた音が聞こえたような気がしたの
はきつと私だけじゃないはず。

「上等よ……！」

と、暁美ほむらが言った後、

豹矢は紫電を纏い、

暁美ほむらは翼をはためかせ、

そして二人は同時にこう言った。

「ぶっ殺すー！」

「殺してやるー！」

お互いの全ての怒りを込めて。